

## 実践研究

# 「日本事情」教育における発題型ラウンドテーブル・ディスカッションの試み

澁谷 きみ子

### 要 旨

本稿は、立命館大学における 2011 年度前期の留学生日本事情科目「日本事情入門」の授業に採用した発題型ラウンドテーブル・ディスカッションの実践報告である。筆者が担当した日本事情入門ではディスカッションを取り入れた授業を展開しており、毎回活発な討論が行われている。しかしながら、多くの受講生が 1 年生であり、大学でのディスカッション形式に慣れていないため、特に前期授業において討論に参加するのは一部の学生に限られる傾向がある。そこで、全員がディスカッションに参加でき、そこで新たな出会いを通して〈自分にとっての「日本」を発見〉(細川 1995:109) できるよう発題型ラウンドテーブル・ディスカッションを実施することにした。

本稿では毎回のラウンドテーブル・ディスカッションのコメント・シートとコース終了時に実施したアンケートによりコースに対する評価を検討する。さらに発題型ラウンドテーブル・ディスカッションの利点と問題点についても考察したい。

### キーワード

日本事情、発題、ラウンドテーブル・ディスカッション、バズセッション、異文化理解

## 1. はじめに

### 1.1 本研究の背景

中曽根内閣の留学生 10 万人計画が 1983 年に始まり、2003 年に達成されたことは記憶に新しい。さらに 2008 年には留学生 30 万人計画が発表され、2020 年を目途に留学生の数を 30 万人にまで増やすことを目標に掲げている。グローバル化の時代にあって、日本の国際化を推し進めていくことは必要不可欠である。留学生を受け入れることで国際的な人的ネットワークを形成・強化し、相互理解を深める。これは、世界に貢献する役割を担っていこうという姿勢の表れと言えよう。

大学における日本語教育は、日本の留学生の増加に伴い、主に日本語科目として整備され充実が図られてきた。一方、「日本事情」は 1962 年に文部省の通達により始まったが、そこで扱われる内容は多岐にわたり、その形態や役割も明確化されているとは言えない。それは留学生の増加に伴い状況が大きく変化し、学習者のニーズの多様性を内包する「日本事情」については「だれ

が「なにを」「どのように」教えるのかというコンセンサスが得られにくいためである。それゆえ、各教育機関や担当者が模索してきたという経緯があるが、近年、「日本事情」は「日本の文化・社会を考えるための能力育成の学習」という観点（細川 1995：103）から、様々なアプローチが行われている。

## 1.2 先行研究

「考え方のための能力育成の学習」という立場からみると、「日本事情」では日本の文化・社会の問題をどのように学習者自身に考えさせるかということが問題になってくる（前掲書：108）。そして、「日本事情」は単なることば教育からことばによる文化の教育へ転換しようとしているのであり、〈自分にとっての「日本」の発見〉への可能性が秘められている（前掲書：109）。つまり、「日本事情」は日本語習得そのものを目標にするのではなく、日本語の習得を通して日本の文化・社会を理解することであり、日本語はそのコミュニケーションの手段であることを意図する。

このような状況の中で、徳井（1997）は留学生と日本人学生の相互交流型討論「ディベカッション」<sup>1)</sup>を試み、クラスで行う討論そのものが異文化コミュニケーションの場として重要な役割を果たしていると述べている。同様に脇田（1996）は異文化コミュニケーションに焦点を当て、留学生と日本人学生の混交クラスによるプロジェクトワークを取り入れ、活気あるディスカッションが実現したこと、および交流の場としての意義を取り上げている。また、重田（2006）は正統的周辺参加（Legitimate Peripheral Participation：LPP）<sup>2)</sup>の考え方を取り入れた実践を試み、知識の習得、日本語力の伸長、学習スキルの習得、人間的成長、さらには大学や地域に参加する足がかりを作ることができたことを報告している。

## 2. 研究課題

### 2.1 現状および問題点

筆者が担当する日本事情科目の一つである日本事情入門では、講義と問題提起型パネル・ディスカッション（澁谷 2010）<sup>3)</sup>を取り入れた授業を実施しており、毎回活発な討論が展開されている。日本事情入門は通年実施科目であるが、半期完結型（15回）で1年生から受講できる。そのため、特に前期授業では日本語能力という点だけでなく、個人的資質あるいは慣れない大学環境という点からディスカッションに消極的な学生も見られる。倉地（1990）は、日本事情における異文化理解教育としての考察を行い、教師が留意すべき10項目の一つに「学習者の目的文化探求活動を促し、独創的な発想を尊重し、それを人前で躊躇なく堂々と表現したり、忌憚なく批判し合えるような自由で暖かいクラスの雰囲気心がけなければならない」ことを取り上げている。しかしながら、筆者が担当する日本事情入門の受講生の大半を占める1年生は、4月に入学したばかりで日本の大学生活にも慣れておらず、日本語科目のような少人数ではないクラスで堂々と表現することに積極的に参加できない様子が見られ、ディスカッションを行っても、一部の学生に発言が集中する傾向がある。

また、日本事情科目は留学生が履修するものであるが、毎回「もっと、日本人の意見を聞いた

い」という感想が寄せられている。日本人学生の参加は、当大学の日本語担当教員で運営している日本語メーリングリストに登録した日本語ボランティアの参加に基づいている。留学生の授業に参加することで交流を深める機会もあり、留学生・日本人学生双方に好評である。しかしながら、受講している留学生はアジアの学生のみということもあり、継続して参加する日本語ボランティアのモチベーションが低下し、ボランティアの参加希望人数は十分とは言えない。

そこで、2011年度前期日本事情入門ではこのような反省をもとに、ディスカッションでより多くの声を反映させるため、バズセッションを組み込んだラウンドテーブル・ディスカッションを実施した。また、授業に参加する日本人学生は日本語ボランティアではなく、アジアの言語を学習している日本人学生に参加を依頼した。バズセッションではこの日本人学生に参加してもらい、より直接的に話し合う機会を持たせた。

## 2.2 発題型ラウンドテーブル・ディスカッション

日本事情入門では、「考え方のための能力育成の学習」という立場に則り、発表では常に学生が「問題提起」することが義務付けられている。それは日本事情入門での発表が、発表の方法を学ぶ場ではなく、〈自分にとっての「日本」を発見〉する場であることを意味するからである。

今回はディスカッションに、より多くの声を反映してもらうため、グループで話し合うバズセッションを取り入れ、「発題型ラウンドテーブル・ディスカッション」という形で行った。ラウンドテーブル・ディスカッションとは、その名の通り、ラウンドテーブル（円卓）でディスカッション（議論）を共有する方法である。自分の抱える問題を他の人とのコミュニケーションを通じてその解決策を探すもので、人的ネットワークを図り、新たな出会いや発見のチャンスが生まれる。「発題型ラウンドテーブル・ディスカッション」は、発表者が問題提起することで、自分にとって「日本」とは何かを考えさせることにつながる。

さらに、バズセッションには確実に日本人学生に参加してもらうため、当大学で第二外国語として中国語および韓国語を履修している学生に依頼した。中国語・韓国語を学んでいる日本人学生はそれぞれの国やその文化に興味を持っているが、中国人・韓国人留学生と話し合う機会は多いとは言えない。日本事情入門は正規留学生科目であり、大半は中国・韓国からの留学生である。日本事情入門の授業で日本の身近なテーマでディスカッションすることは日本人学生にとっては自分が学んでいる外国語の国や人々をより理解することにつながり、留学生にとっては日本を理解し、見つめ直すきっかけになる。

本稿では、この「発題型ラウンドテーブル・ディスカッション」で学生が自分と他者がどのように向き合ってきたかを報告する。また、授業形態の感想からさらなる課題について述べる。

## 3. 調査概要

### 3.1 調査機関の日本事情科目

表1は筆者が所属する立命館大学における文学部・法学部・国際関係学部・産業社会学部・政策学部・映像学部・国際インスティテュートの学生が受講する日本事情科目である。今回、筆者が取り上げる日本事情入門は、日本理解の基礎的な位置付けであり、受講生も増加傾向にあり

70 名以上になることもあった。そのため 2010 年度より教育的適正に配慮し、定員 50 名の事前登録科目<sup>4)</sup>とした。

表 1 留学生日本事情科目 (2011 年度前期)

配当回生	科目名	
1 回生配当	日本事情入門	事前登録科目 (定員 50 名)
	日本事情特殊講義	
	日本の社会	隔年開講科目
	日本の歴史	
	日本の経済	
2 回生配当	日本語教授法	
	日本語学	

### 3.2 クラス概要と調査協力者

本調査は 2011 年度前期に日本事情入門を受講した正規留学生 48 名を対象とした。日本語レベルは上級であり、詳細は次のとおりである。

性別：男性 13 名、女性 35 名

国籍：韓国 41 名、中国 5 名、台湾 2 名

学年：1 年生 36 名、2 年生 8 名、3 年生 2 名、4 年生 2 名

### 3.3 授業概要

日本事情入門ではコースの前半 6 回に教員による講義を行い、後半 9 回にラウンドテーブル・ディスカッションを実施した。前半の講義では主に日本にいる外国人を取り巻く状況について、統計資料、視聴覚教材 (ニュース、専門 DVD) を用いて行った。

ラウンドテーブル・ディスカッションは通常、一つのテーブルに話題提供者とおおよそ 5 名から 10 名以上の参加者が着席し、ファシリテータ (進行役) を中心に、討議を進めていく。本授業では、グループ発表にこのラウンドテーブル・ディスカッション方式を取り入れた。ただし、話題提供者は各テーブルに着くのではなく、全員の前で発表 (話題提供および発題) することとした。20 分の発表 (話題提供および発題) と、質疑応答・バズセッション・意見交換の 70 分が 1 セッションとなり、1 コマ 90 分の授業を構成する。ここで述べるバズセッションとはテーブルごとのグループの話し合いとする。具体的には、まず 1 グループ 5 名程度の発表者が日本の文化・社会について 1 つのテーマを取り上げ、レジメまたはパワーポイントを用いて発表し、最後に発題する。フロア (聴衆) は 1 つのテーブルに 5 名から 8 名程度が着席するが、テーブルに着くメンバーは基本的に自由であり、毎回変わる。進行役は教師である筆者が担当した。

#### 進め方

- ① 発表グループによる話題提供および発題 (20 分)
- ② 専門用語など、わからない言葉の解説と進行役によるまとめ (10 分)
- ③ 「発題」に関する意見をテーブルごとで話し合う (10 分)
- ④ テーブルごとに代表者が意見を発表する (10 分)
- ⑤ 発表グループによる応答 (10 分)

「発題」を発展させた形で、以下、同様に③～⑤の順で時間内までディスカッションする

⑥ 進行役によるまとめ（5分）

**教室配置**（図1参照）

発表者はフロアに向かって座り、ネームプレートを置く。フロアは6名分の机を合わせ、不足する場合は椅子のみを追加する。

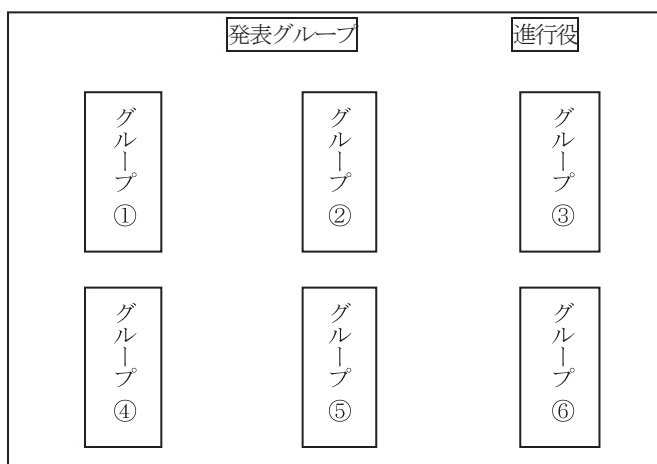


図1 教室配置

各グループが発表するテーマは次のような手順で絞り込んだ。まず、第1回目の授業の時点でブレインストーミングを行い、学習者から取り上げたいテーマについてアンケート調査し、それぞれのテーマを小分類とした5つの大分類のテーマ（日本文化、国際、時事、現代社会、その他）を提示した。次に発表のグループ分けをし、グループごとにテーマを決定していった。各テーマについては表2のとおりである。

表2 テーマ

	日にち	テーマ
1	5月31日	災害時のメディアの役割
2	6月7日	韓・中・日の食文化
3	6月14日	学内の全面禁煙
4	6月18日	日本の外国人差別－特別永住者の「参政権」－
5	6月21日	日本の大学生の就職活動
6	6月28日	ホームレス
7	7月5日	青少年犯罪と死刑
8	7月12日	韓流ブーム
9	7月19日	日本の性文化

Note：6月18日は土曜日、それ以外は火曜日実施

### 3.4 調査手順

徳井（1997）の「ディバカッション」を参考に自己評価、他者評価、グループ評価、授業評価を行った。これらは毎回の授業で提出されたコメント・シート（資料1参照）をもとに調査した。自己評価は自分のテーブルにおける参加度を5段階評価で、他者評価は自分のテーブルで頑張っていた人の名前とその理由を記述で、グループ評価は自分のテーブルのメンバーが積極的に討論していたかを5段階評価で回答を求めた。また、授業評価はその日のラウンドテーブル・ディスカッションを満足度の観点から5段階評価で回答し、その理由を記述することとした。

さらにラウンドテーブル・ディスカッションという授業形態について、最終授業のアンケート（資料2参照）により回答を求めた。アンケートでは授業形態の満足度と理解の深まりを5段階で評価し、ラウンドテーブル・ディスカッションの感想を記述してもらうこととした。

#### 資料1. コメント・シート

あなたのラウンドテーブルの番号： 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6					
1. 今日のテーブル（グループ）におけるあなた自身の参加について評価してください。					
全く参加していない				非常に積極的に参加した	
1	2	3	4	5	
2. 今日、あなたのテーブル（グループ）でがんばっていた人は誰ですか。					
がんばっていた人の名前（ )					
その理由（ )					
3. あなたのテーブル（グループ）について評価してください。					
あまり討論していなかった			積極的に討論していた		
1	2	3	4	5	
4. 今日のラウンドテーブル・ディスカッションについて評価してください。					
全く満足していない			非常に満足		
1	2	3	4	5	
その理由（ )					

#### 資料2. ラウンドテーブル・ディスカッションに関するアンケート

1. ラウンドテーブル・ディスカッションの授業形態について					
① 全く満足していない				非常に満足	
1	2	3	4	5	
② ラウンドテーブル・ディスカッションで、それぞれのテーマについて理解が深まりましたか。					
全く深まらなかった			非常に深まった		
1	2	3	4	5	
2. ラウンドテーブル・ディスカッションについて感想を書いてください。					
（ )					

## 4. 結果と考察

### 4.1 自己評価と授業評価

毎回フロアのコメント・シートにより、自己評価は自分のテーブルへの参加度という観点から、授業評価は満足度という観点からそれぞれ5段階で評価した。

#### 4.1.1 参加度と満足度

図2は、参加度（自己評価）と満足度（授業評価）を5段階で評価し、平均値を算出した結果である（詳細な数値は資料3を参照）。第2回目の「韓・中・日の食文化」がやや低いものの概ね4.0以上の参加度と満足度が得られた。また、参加度と満足度はほぼ連動しており、積極的に参加できる授業では満足度が高いことが確認できた。第2回目の「韓・中・日の食文化」は発表グループが準備段階において協力的ではなかったことを反省点として挙げており、特に発題が不明確であったため、話し合うべき問題点を理解できなかった学生がいた。しかしながら、ここでは進行役である教師の力量不足は否めない。発題については発表の1週間前に教師と話し合う予定であったが、この段階でほとんどのグループが発表の準備ができておらず、発題については未定であった。実際には各グループのレジュメは発表前日に添付ファイルとして教師に送られ、それを教師が印刷して授業時に配布しており、発題についてグループ当事者と話し合う時間がなかった。第2回目の発表グループとは授業開始時に発題について確認したが、「どうしてよいかわからなかった」との回答であった。発題の方向性について事前に教師がより積極的に働きかけるべきであったと考える。

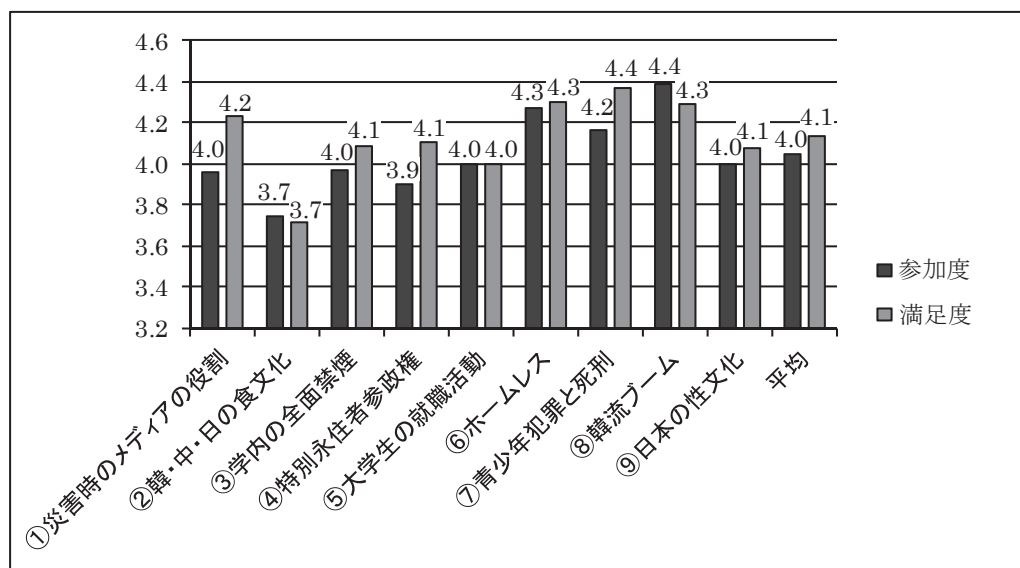


図2 フロアの参加度と満足度

Note：小数点第2位を四捨五入しているため、同数値であっても棒グラフに差がみられる。

資料 3. コメント・シートによる参加度と満足度

	テーマ	参加度(5段階評価)		RT満足度(5段階評価)	
		平均	N	平均	N
1	災害時のメディアの役割	4.0	35	4.2	34
2	韓・中・日の食文化	3.7	39	3.7	39
3	学内の全面禁煙	4.0	36	4.1	36
4	特別永住者参政権	3.9	38	4.1	38
5	大学生の就職状況	4.0	39	4.0	39
6	ホームレス	4.3	37	4.3	37
7	青少年犯罪と死刑	4.2	38	4.4	38
8	韓流ブーム	4.4	41	4.3	41
9	日本の性文化	4.0	39	4.1	39
	平均	4.0		4.1	

#### 4.1.2 満足度の理由

満足度の高かった⑥ホームレス、⑦青少年犯罪と死刑、⑧韓流ブームの理由を見てみると、⑥ホームレスでは「発表の説明が分かりやすく、発題がよかった」「グループでの話し合いが活発に行われた」、⑦青少年犯罪と死刑では「賛成の意見も反対の意見もしっかり述べていた」「フロアの質問にきちんと答えていた」、⑧韓流ブームは「身近なテーマでいろいろな意見を聞くことができた」といった回答があった。また、「活発な討論ができた」「みんなが積極的に意見を述べた」という回答は3つのテーマで多く見受けられた。

ここで、注目したいのは発題についてのコメントである。発題が分かりやすくディスカッションしやすい場合、バズセッションの段階で活発に意見交換が行われ、全体の意見発表や意見交換も盛り上がる。そこで、それぞれのテーマの発題を見てみると、大きく賛成か反対かを問うもの、理由を問うもの、意見を問うものがあることが確認できた(表3参照)。意見を問うものは概ねディスカッションしやすく、参加度・満足度とも評価が高い。例えば、⑥ホームレスでは「ホームレス街を作る」など独創的なアイデアが出たり、⑧韓流ブームでは、「ブームで終わ

表 3 テーマごとの発題

	テーマ	発題
1	災害時のメディアの役割	災害報道の際にメディアが持つべき姿勢とは
2	韓・中・日の食文化	自分の食習慣について「犬みたい」と言われたら
3	学内の全面禁煙	立命館大学構内の全面禁煙に賛成か反対か
4	日本の外国人差別 -特別永住者の「参政権」-	特別永住者の参政権付与に賛成か反対か
5	日本の大学生の就職活動	日本での就職活動をどのように考えるか
6	ホームレス	ホームレスを減らすためにどうするべきか
7	青少年犯罪と死刑	日本で18、19歳の未成年者に死刑を下すことについてあなたの考えを述べてください
8	韓流ブーム	韓流ブームはこれからどうなるか
9	日本の性文化	なぜ日本の性は開放的になったのか



る」グループと「アジア文化を形成していく」グループがお互いの意見を尊重し合いながら討論し、様々な角度から韓流ブームを見直すきっかけになったようである。一方、賛成か反対を問うものもディスカッションしやすく、討論が活発に行われる傾向にあった。

表4は発題に対して出された主な意見をまとめたものである。ラウンドテーブル・ディスカッションでは発題がその後の流れでさらに発展した形になって話し合われるため、ここでも進行役の調整力が問われる。たとえば②韓・中・日の食文化では「自分の食習慣について犬みたいと言われたら」という発題に対し「傷つく、怒る」か「別にいい」といった内容に終始したため、進行役から「他の国へ行けばその国の食習慣に合わせるべきか」という形で再度話し合った。また、③学内の全面禁煙では予想外に「全面禁煙化は隠れ煙草を増長し、受動喫煙も増える」との理由で反対意見が多かったため、引き続き「全面禁煙以外の受動喫煙を減らす方法」を話し合った。⑧韓流ブームでは「今後韓流ブームはようになるか」という発題から発展して「韓流文化が生き残るためにはどうすればよいか」を話し合った。一方、⑤日本の大学生の就職活動では発題が「日

表4 ラウンドテーブル・ディスカッションの主な意見

	テーマ	意見
1	災害時のメディアの役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の報道は正確性重視のため、緊迫感がなく情報や支援が後手に回った感がある</li> <li>・韓国の報道は大きすぎるが、マスコミから政府への働きかけが活発</li> </ul>
2	韓・中・日の食文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・犬みたいと言われたら怒る</li> <li>・傷つく</li> <li>・別にいい</li> <li>(発題2: 他の国へ行けばその国の食習慣に合わせるべきか)</li> <li>・それぞれの国の食文化は理解しなければならない</li> <li>・マナーはその国に合わせたほうがいい</li> </ul>
3	学内の全面禁煙	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全面禁煙は隠れタバコを増加させる</li> <li>(発題2: 全面禁煙以外の受動喫煙を減らす方法)</li> <li>・喫煙シエルターの増設</li> <li>・罰金を科す</li> <li>・禁煙成功者に奨学金を出す</li> </ul>
4	日本の外国人差別 -特別永住者の「参政権」-	<ul style="list-style-type: none"> <li>・税金を払っているのだから地方参政権は付与すべき</li> <li>・日本のために政治に参加するわけではないので必要ない</li> </ul>
5	日本の大学生の就職活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>(発題変更: 卒業後、日本で働きたいか)</li> <li>・日本に留学したのだから日本で就職したい</li> <li>・文化の違いや言葉の問題、人種差別等があるので日本で働きたくない</li> </ul>
6	ホームレス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・職業訓練を行う</li> <li>・ホームレス街を作る</li> <li>・専門センターを作る</li> </ul>
7	青少年犯罪と死刑	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未成年の定義を一元化すべき</li> <li>・18歳は更生の可能性あり</li> </ul>
8	韓流ブーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイドルだけでは終わってしまう</li> <li>・アジアをターゲットにしていく</li> <li>(発題2: 韓流文化が生き残るためにはどうすればよいか)</li> <li>・日本語習得</li> <li>・コンテンツの拡大</li> <li>・英語を習得してアメリカ進出</li> </ul>
9	日本の性文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・性教育により開放</li> <li>・表現の自由</li> <li>・性の商品化</li> </ul>

Note: 点線は1回目の発題の主な意見、点線下は2回目の発題の主な意見

本での就職活動をどのように考えるか」という漠然とした感想を求めるものであったため、より話し合いやすいように「卒業後、日本で働きたいか」という形で討論を行った。

発題に関しては教師の事前の指導はもとより、進行役としてディスカッションのテーマに関して広範な知識を得ておくと同時に、ディスカッションの進行状況に合わせて柔軟に対応していかなければならないと実感した。

## 4.2 他者評価とその理由

### 4.2.1 他者評価

他者評価は、全てのコメント・シートをもとに自分のテーブルで特に頑張った人の名前として挙げられた総回数を表示した（表5参照）。学生はL1～L48としたが、回答には「全員」の場合もあり、さらに同じテーブルに参加した日本人学生の場合の名前もあった。一度も名前の挙げられなかった学生もいたが、全員が頑張ったという評価が最も多かったことから分かるように、バズセッションでは少人数の話し合いが活発に行われていた。

表5 他者評価

	回数		回数		回数		回数		回数
L1	16	L11	2	L21	10	L31	6	L41	0
L2	6	L12	1	L22	1	L32	10	L42	4
L3	9	L13	2	L23	6	L33	0	L43	4
L4	3	L14	3	L24	4	L34	6	L44	3
L5	9	L15	13	L25	11	L35	4	L45	3
L6	1	L16	6	L26	13	L36	9	L46	3
L7	11	L17	15	L27	9	L37	2	L47	1
L8	1	L18	8	L28	5	L38	1	L48	8
L9	1	L19	7	L29	9	L39	0	全員	22
L10	6	L20	7	L30	3	L40	14	日本人	4

Note：網かけは10回以上名前が挙げられた学生

### 4.2.2 他者評価の理由

他者評価の理由として最も多かったのが、「グループの代表として発表してくれた」というものである。バズセッションで話し合った意見を全体の話し合いの中で発表する学生はグループの代表という形になるため、その意欲を評価したものと考えられる。また、話し合いをリードしたり、積極的に意見を述べたりしたことを評価しているコメントも多かった。学生の中で最も他者評価の回数が多かったL1へのコメントは「積極的に自分の意見を述べた」であった。

バズセッションの間、進行役の筆者は机間巡視し、各テーブルでの話し合いの様子を見ながら進み具合を確認した。また、話し合いが行き詰っている場合は、方向性を示唆するなどのサポートも行った。回数を重ねるごとに話し合いが活発になり、バズセッションの時間が延長されることも度々あった。他者評価はお互いが相手の良いところを評価するという意味合いがあり、このことがディスカッションに対するプラス評価を得やすい環境作りに役立っていたのではないかと

考える。

### 4.3 グループ評価

グループ評価は自分のテーブルのメンバーが積極的に討論に参加していたかを5段階で評価したものである。各テーマのグループ評価の平均は図3のとおりである。やはり発題が不明確であった②韓・中・日の食文化は全体的に積極的に討論できていたとは言い難い。また、⑤大学生の就職活動でも自己評価や授業評価は低くはなかったもののグループとしては活発に討論できていなかったことが窺える。コメント・シートを分析すると、ある特定のテーブルに関して特に評価が低いことが確認できた。ラウンドテーブル・ディスカッションでは毎回任意のテーブルに着くが、授業そのものに積極的ではない学生や遅刻してきた学生はどうしても後方や入り口近くのテーブルに着く傾向がある。そのため、このような学生が同じテーブルに集まってしまった場合、討論そのものが積極的に行われにくい環境にあると言える。

各テーブルのメンバーは一部定着していく傾向にあったが、必ずしも同じというわけではなかった。メンバーを指定してしまうより、学生自らが多くの学生と交流する場面を構築していきけるような雰囲気作りが必要であろう。

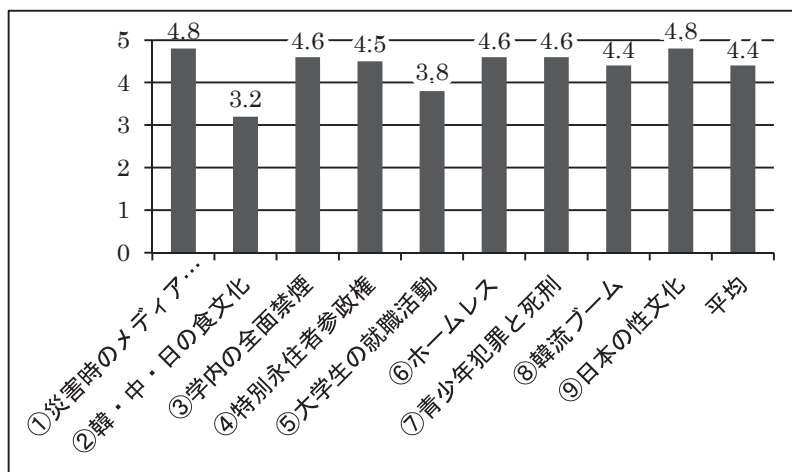


図3 グループ評価

### 4.4 授業形態の評価

最終授業後にラウンドテーブル・ディスカッションに関するアンケートを行い、満足度と理解の深まりを5段階評価で、感想を記述で回答を求めた。

#### 4.4.1 ラウンドテーブル・ディスカッションの満足度と理解の深まり

ラウンドテーブル・ディスカッションでの満足度（4.12）と理解の深まり（4.19）の評価の平均はほぼ同程度で全体的には高い評価と言えるであろう（表6参照）。評価のばらつきもほぼ同じであり、満足度と理解の深まりは相関的である。評価の低かったものも含め、感想を参考に考察する。

表 6 授業形態による満足度と理解の深まり

	平均	評価点	1	2	3	4	5	合計
満足度	4.12	人数	0	1	7	21	14	43
理解の深まり	4.19		0	0	7	21	15	43

#### 4.4.2 ラウンドテーブル・ディスカッションの感想

多くの学生が「いろいろな人と意見交換できて視野が広がった」といった感想を述べており、「他の人とディスカッションすることで考えを深めることができた」、「問題を深く分析する力が鍛えられた」という感想もあった。また、「今期の進め方は自分の意見が出せる雰囲気だった<sup>5)</sup>」、「授業で異文化交流もできた」、「みんなで一つのテーマについて頑張ることが楽しかった」というクラス全体のつながりを感じさせるものもあった。これは、徳井（1997）が実践した「ディベカッション」や脇田（1996）の留学生と日本人学生の混交クラスによるプロジェクトワークと同様、クラスでの討論が異文化コミュニケーションの場として役立ったことを意味する。

一方で、「私語が多く、おしゃべりしている人も多かった」という感想を3名の学生が挙げている。確かにグループでの話し合いが盛り上がり、意見をまとめることもなくひたすら仲間内で語り合っている場面も見られた。ただ、それを私語と捉えるかどうかは個人によって異なり、私語ではなく活発な討論と考える学生もいたようだ。しかしながら、全体のディスカッションであるテーブルごとの発表時においてもグループでの話し合いを続けていたこともあり、場面ごとの切り替えを明確にする必要があるという印象を持った。

## 5. おわりに

### 5.1 まとめ

ラウンドテーブル・ディスカッションは、他者との距離が近いことで話し合いが活発に行われ、ディスカッションへの参加度を上げるために効果的な方法である。参加度と満足度は比例する傾向があり、ディスカッションに積極的に参加する態度を持つことでディスカッションそのものを肯定的に捉えることができる。また、他者を評価することで同席したテーブルのメンバーにプラス評価を意識させ、ディスカッションが活性化していた。「自分と違う意見を聞いて議論することが良かった」という感想からも分かるように、ラウンドテーブル・ディスカッションを通して他者の声を聞こうとする意識が高まることが確認できた。そして、このような多角的な視野を持つことが自分にとっての「日本」発見につながるのだと言えよう。

また、今回のラウンドテーブル・ディスカッションでは日本人学生の参加もあり、異文化交流の場としての役割も果たしていた。1つのテーマで日本人学生を含めた他国の留学生とディスカッションすることでお互いの文化の違いを理解し合うなど、相互理解を深めていることが確認できた。学生の中には「他学部の学生と発表準備をしたことが良かった」「一緒に準備することによって、グループ同士の交流を深めることができた」との感想もあり、ディスカッションのみならず、グループ発表が相互交流の一役を担っていた。

## 5.2 今後の課題

日本人学生がバズセッションに加わることで、より身近に日本人の考え方を聞くことができ良かったというコメントがあり、日本学生の参加は非常に好評であった。今回は第二外国語として韓国語、中国語を学んでいる日本人学生に依頼して各テーブルに1名ずつ入ってもらった。しかしながら、これは自由参加であるため、コース後半に入ると日本人学生の授業が忙しくなったこともあり、最終授業では参加する日本人学生はいなかった。日本人学生にとってはボランティア的な位置付けであり、授業に参加しても単位が取れるわけではない。参加する日本人学生の確保が今後の課題である。

発表については他の授業でも経験し、少しずつ慣れてきているようであったが、本授業では事実や意見を述べるだけの発表と異なり、問題を掘り下げるために発題しなければならない。この点が学生にとっては非常に困難な作業であったと実感する。さらに発題の良し悪しがディスカッション全体の流れを左右するといっても過言ではない。まず、どのようなディスカッションを目指すのかを考え、それを踏まえ、発題を決定するよう指導する必要がある。また、発表グループによってまとまりの偏りがあるので、リーダーを任せられる学生を絞り込んだり、メンバーを入れ替えたりするなど教師の働きかけが必要であろう。ただし、教師の介入は最小限度に留め、学生の自発的な協働活動をサポートする姿勢を心がけたい。

さらに、私語については特にバズセッションのときに顕著に見られた。今回、発表グループはバズセッションの間を全体の意見交換のための準備時間としていたが、既に調べた資料は手元にあり、準備時間は必要不可欠なものとは言えなかった。そこでバズセッションには発表グループのメンバーを各テーブルに一人ずつ配置し、話題提供者とともに話し合うことで、私語を軽減させることができるのではないかと考える。全員が話し合える雰囲気作りはできているので、学生自身がテーマに対して真摯に向き合い、理解を深め、そして他者の声を生かせる環境作りを今後も図っていききたい。

### 注

- 1) 人数の多いクラスでのディベートの中に、少人数のディスカッションを組み込んだ討論形態。
- 2) 正統的周辺参加とは、学習は共同体の中での実践を通して他者との協力の中で実現させるものであり、社会的かつ文化的な意味を持っているという（レイブ&ウエンガー 1993）。
- 3) ブラジルの識字教育実践者フレイレは、識字教育の基本原則として課題提起型教育（Problem-posing Education）を提唱した。教師が一方向的に語りかけ生徒を満たす「銀行型教育」（Banking Education）を否定し、生徒が主体的に課題を選びとり設定して、現実世界の変革とかぎりない人間化へ向かっていくための「課題提起型教育」が本来の教育のあり方であると主張した（フレイレ 2002：80）。問題提起型パネル・ディスカッションはこの「課題提起型教育」を援用し、実践されている。
- 4) 受講者数を制限している科目は、通常の実験登録の日程に先立ち「事前登録」によって受講者を決定する。申込者が定員を超過した科目は、抽選によって受講者を決定する。
- 5) 2010年後期に日本事情入門を受講した学生によるコメント。

### 参考文献

- 倉地暁美「学習者の異文化理解についての一考察 — 日本語・日本事情教育の場合 —」『日本語教育』71号、1990年、158-170項。
- 重田美咲「基礎日本語学習者のための「日本事情」— 大学1年生を対象とした場合 —」『日本語教育』131号、2006年、41-49項。
- 澁谷きみ子「問題提起型パネル・ディスカッションの取り組み — 日本事情教育を通して —」『立命館高等教育研究』第10号、2010年、187-202項。
- 徳井厚子「異文化教育としての日本事情の可能性 — 多文化クラスにおける「デイベカッション」（相互交流型討論）の試み —」『日本語教育』92号、1997年、200-211項。
- フレイレ, P. 著、小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『非抑圧者の教育学』亜紀書房、2002年。
- 細川英雄『日本語教師のための実践「日本事情」入門』大修館書店、1994年。
- 細川英雄「教育方法論としての「日本事情」— その位置づけと可能性 —」『日本語教育』87号、1995年、103-113項。
- レイブ, J.・ウェンガー, E. 著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』産業図書、1993年。
- 脇田理子「留学生と日本人学生による異文化コミュニケーション — 「現代日本事情」より —」福井大学教育学部紀要 I（人文科学 国語学・国文学・中国語学）第47号、1996年、27-35項。

## Using a Problem-Posing Round-Table Discussion in “Japanese Culture and Society” Studies Class

SHIBUTANI Kimiko (Lecturer, Ritsumeikan International, Ritsumeikan University)

### Abstract

This paper reports on the use of a problem-posing round-table discussion in the “Introduction to Japanese Culture and Society” class for international students at Ritsumeikan University in the spring semester of 2011. In this class, students are expected to engage in active discussion. However, many students are freshmen and are not used to discussions. Particularly in the spring semester few students joined discussions. Therefore, a problem-posing round-table discussion was held in order for everyone to participate in the discussion and to discover Japan on their own terms through meeting new people in this course. This paper examines the students’ course evaluation shown by students’ comment-sheets collected after every class and questionnaire comments at the end of the course. It also aims to discuss the pros and cons of “the problem-posing round-table discussion”.

### Keywords

Japanese Culture Studies, Problem-Posing, Round-Table Discussion, Buzz Session, Cross-Cultural Understanding

